

[学会]

第567回 千葉医学会例会
第11回 肺癌研究所例会

日時：昭和52年1月14日

場所：千葉大学医学部附属病院第1講堂

1. 教室における自然気胸の治療成績

南波美伸, 佐藤行一郎 (千大・肺研外科)

自然気胸は若年の男子に多く、また最近増加しているといわれているが、現在治療法が確立されてはいない。我々は当科の治療成績から治療法を考えてみた。症例数は55例であり年次別、年齢別、男女別、左右別、虚脱程度とその症例数、治療別の成績を検討した。次いで手術の術式と手術時所見での嚢胞性変化の有無、また手術に至るまでの再発回数と初回治療から手術までの期間について検討した。初回で虚脱程度の軽いものは安静でよいが、中等度以上は持続吸引療法を行ない、再発例に対しては積極的に手術を行うべきであるという結論を得た。

2. 気管支再建術を行つた交通外傷の一例

門山周文, 大岩孝司 (千大・肺研外科)

25歳男性、交通事故により胸部打撲、受傷後7日目頃より左無気胸出現。気管支鏡、気管支造影により左主気管支の気管分岐下3cmに強い狭窄が認められ、左主気管支不完全断裂と診断された。受傷後120日目に端々吻合による左主気管支再建術を行ない、機能的にも相当の改善が認められ、現在、なお経過観察中である。

3. BAIにより著明な腫瘍陰影の縮小をみた2症例

由佐俊和, 和田源司 (千大・肺研外科)

症例 1) 64歳男。主訴、血痰。気管支鏡下細胞診により、右上葉の角化扁平上皮癌と診断したが、肺機能不良のため手術不能と判定、現在までに計3回のBAIを行い、いずれもMMC 10mgを注入。著明な腫瘍陰影の縮小をみ、血痰等の自覚症状なく、遠隔転移の徴候もなく経過良好である。

症例 2) 44歳男。主訴、咳嗽。右上葉の小細胞未分化癌で2回のBAI (MMC 10mg+BLM 15mg×2)により著明な腫瘍陰影の縮小をみたが、約3カ月後より腫

瘍陰影は再び増大し、肝、脾及び大脳転移のため死亡した。

上記二例を含め本施設で過去3年間 (S 49~S 51年) に2回以上のBAIを行ったものは7例で、5例は手術不能例、1例は術後の再発例であり、1例は骨肉腫に対し、肺転移巣を想定して行ったものである。骨肉腫を除く6例中5例では、腫瘍部に一致したHypervascularityの所見があり、BAIによる効果が認められるが、進行性肺癌の症例では予後不良な結果となっている。しかし、症例1)のような場合には頻回のBAIによる予後良好な結果が期待されるものと考える。

4. 停留睾丸に発生したゼミノーム1例

馬場雅行 (小見川中央病院)

停留睾丸より悪性腫瘍が発生しやすいことは古くから知られているが、我々は最近右腹腔内停留睾丸より発生したゼミノームを経験したので報告する。患者は39歳男性、主訴は腹痛。触診にて右下腹部に手拳大で表面平滑、弾性やや硬、移動性に乏しい腫瘍を認めた。外陰部は男性型で右睾丸の欠損を認めた。腎盂尿管造影にて右尿管の圧排像を認めたが他の諸検査では異常を認めなかった。摘出術を施行し、術後⁶⁰Co照射を行なった。

5. 術前診断が困難であつた兩大血管右室起始症 (DORV) の1例

柴 光年, 中村常太郎
(県立鶴舞・心臓外科)

症例は8カ月の女性。生後3M。近医にてチアノーゼ心雑音を指摘され精査の目的で入院。心カテ、ACGの結果内臓正位。D型大血管転位、単心室の診断の下にMcGOONの手術を施行した。人工心肺併用超低体温下にスパイラルにダクロンパッチを縫着、術後順調であつたが2カ月目にLOSで死亡した。剖検してみると低形成の左室とPA弁直下のVSDが存在しており、Aoが